

氏名 松村 侑紀
ヨミガナ マツムラ ユキ
学位の種類 博士（美術）
学位記番号 博美第536号
学位授与年月日 平成29年3月27日
学位論文等題目 〈論文〉 「標識色」と「隠蔽色」 蠱惑と警戒のテリトリー
〈作品〉 想いの儘に
蝕み、内在するもの
〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	手塚雄二
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	吉村 誠司
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	梅原 幸雄
（副査）			（	）
（副査）			（	）
（副査）			（	）
（副査）			（	）
（副査）			（	）
（副査）			（	）

（論文内容の要旨）

本論文では、私が無意識のうちに選別し画面に配置しているモチーフが、生物の持つ警戒心と深い関係があることについて考察する。描くモチーフは、画面の奥に広がる自身のテリトリーに足を踏み入れられるまでの障壁（柵）として、自身を護る鎧となる。

生物は皆、それぞれに色を纏う。捕食者の目から逃れるための保護色や、有毒な針や牙、不快な臭いや味と結びついた色彩や模様 of 警戒色。それらは大きく分けると「**標識色**」と「**隠蔽色**」に二分される。具体的な色に例えると、前者は黄色や赤色、青色など比較的目立ちやすい色が多く、後者は灰色や茶色、肌色など地味な色が多いように見えるが、生物の生息環境によって何色が目立つかは様々である。さらに「**標識色**」には、幼虫や蛾に見られる眼状紋等も含まれる。絵画制作では、私は「**標識色**」の中でも警戒色や威嚇色を持つ生物に魅力を感じており、中でも眼状紋やその連続に蠱惑されている。

標識色

警戒色 ・ 威嚇色眼状紋など
（目立ちやすい色が多い）

隠蔽色

保護色
（地味な色が多い）

私的空間とは、無防備なままのテリトリーであり、好き勝手に遊べる庭である。その前に構える障壁

(柵)は、生物が持つ防御本能と同じく、相手に対する警戒や威嚇の表れである。また私は、障壁となるモチーフを柵(又は鎧)と考え、色よりその形状を重視している。生物が持つ警戒色・威嚇色の形状を借り、作品の中だけに存在する自身のテリトリーを護る障壁とすることで、理想的な、より居心地の良い内側を造りあげているのだ。

人が色や形に嫌悪感や警戒心を抱く理由は様々であるが、そこには人類の進化によって習得された生存本能が深く関係すると考えられる。本論文では、私の絵画制作も他の生物と同様、鑑賞者を引きつけるための斑紋作りであると同時に、それを速くで把握しながら潜む自身の隠蔽であること。とくに自作品が、盪惑の表れである「標識色」と、警戒心の表れである「隠蔽色」が複雑に絡み合った、自身が携えることの出来なかった体色であることを論証した。

本論文の構成は、以下の通りである。

第1章 「標識色」と「隠蔽色」では、生物が生き抜くために携えた色や模様が、様々な自然の摂理から、タイトルとした「標識色」と「隠蔽色」に二分されていることについて述べる。自作品の根底に潜む色や模様と、生物の持つそれらとの関係性について自らの見解を述べた。

「標識色」の中でも、蛾やヒョウモンダコ、連続する珊瑚、眼状紋、人面など、生物が相手を警戒・威嚇するために持つ模様や形を、制作モチーフとして扱っていることについて、自身がそれらに惹かれる理由と、人々がそれらに対して描くイメージを検証した。

幼い頃に訪れた山中で見た植物や、自分で育てた植物、それに付く虫などから影響を受けたこと、現在も趣味として奇怪な形状の植物を生育していること、そしてそうした模様に身震いするほど魅了されている心理を追った。また、人類全体の16%が嫌悪感を覚えるというトライポフォビアの症状を誘発する、リング模様の空間連続性と高いコントラストについて、草間彌生の作品を用いて解説し、同時に、その不気味な連続模様を描く心理を、自身の作品と照らし合わせながら解析した。

また、生物が攻撃や自衛のため、体色や形を周囲のものや動植物に似せることについて、シロギクの花弁に擬態するハナグモを用いて分析した。

第2章 盤惑と警戒のテリトリーでは、相手を警戒しつつも観察していきたい、しかし必要以上に近寄って欲しくないという心理について分析した。

目立つ色彩を用い、魅惑的だが毒々しさを併せ持つ点で自作品と類似する、蜻川実花の写真作品について検証した。彼女の作品の特徴は、赤を基調とした極彩色とも警戒色ともいえる強い毒々しさである。モチーフは異なるが、自作品の持つ盤惑の感覚に近いものがある。また、自身が生まれ育った静岡県と、東京での人口密度の違いから生じた警戒心で、他者との距離を意識するようになった状況を考察した。自分が認識されていることから生じた人の顔(特に目)に対する恐怖心と、他者からの自己の隠蔽願望が強まり、いつしか「隠蔽色」を纏いたいと考えるようになった心理について述べた。ただここでの隠蔽とは、自身が消失する隠蔽ではなく、カメレオンやシマウマ、ヒョウのように、自身の姿はカモフラージュしながら、相手の観察はしていきたいという心理である。また同様の警戒を、京町屋の、中からは見えるが外からは見えない特徴的な格子や、伴大納言絵巻での扇の骨の隙間から覗き見る使い方から検証した。私的空間とは、自身の無防備なままのテリトリーであり、ユートピアのようなものでもあること。それを護るために構える障壁について、色と形の両面から、自作品で解説した。

第3章 提出作品では、本論文で論じてきた「標識色」と「隠蔽色」のあり方を、提出作品2点で解説した。

終章では、本論文での論考を踏まえ、現時点での課題と今後の展望について述べた。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、都市での膨大な見知らぬ他者の視線に恐怖を感じる筆者が、自己を隠蔽しつつ表現者としては他者を惹きつけたい心理と表現を、生物界の擬態や体色の論理を援用して考察した論考である。

捕食をめぐる攻防がくり広げられる生物界では、強靱な体や毒などの攻撃力を持たない生物の場合、防御

のために目立たなくするか、警戒させて遠ざける毒々しい体色をまったりする。第1章ではまずその体色を、「標識色」と「隠蔽色」に大別して確認する。「標識色」は原色系のどぎつさで相手を遠ざけ、「隠蔽色」は地味で目立たない隠れる色であること。それを利用した擬態として、前者に「ベイツ型擬態」、後者に「ベッカム擬態」などがあること。また警戒させるために眼の文様(眼状斑)をまとう生物も多く、小さなツブツブの集合体に多くの人が嫌悪感を覚えるトライポフォビア(集合体恐怖症)の要因を、自作品でも用いていることを述べる(水玉や、提出作品「蝕み、内在するもの」での玉虫など)。第2章では、自身をカモフラージュしながら相手を観察していきたい心理を、京町屋の格子や、過去の美術作品「伴大納言絵巻」「年中行事絵巻」などでの扇の骨の隙間からのぞき見る人物を例に確認する。同時に、警戒させながら惹きつける挑発的な表現事例として蜷川実花をあげ、論文のサブタイトルにいう「蠱惑と警戒」の表現例として共感を示している。そして第3章で、提出作品「想いの儘に」「蝕み、内在するもの」の2点について解説している。

自身は画面奥に潜みながら、前景モチーフの間から観者をのぞく形の筆者の作品の場合、一見するとそこに何が描かれているのか、二重画像のように分かりにくいケースが多い。また自身が隠れるために置かれた前景が、柵としての障害物か、標識色や隠蔽色で処理されているのかも、やや分かりづらい。筆者はこれを第2章の最後で、奥の自分、その前の柵(障壁)、柵の表面に施された蠱惑と警戒の色彩、という三層構造で明快に示している。ただそれは提出作品「蝕み、内在するもの」で、すでに新たな展開を見せている。恐怖や警戒が、外在する対象によってだけでなく、内在する自身の心理によって引き起こされることに思い至ったことで、ここでは蠱惑と警戒の玉虫が、人の表面と奥を行き来しながら蝕む描写へと変化していることを述べる。そもそも奇怪な色や形への筆者の関心は幼少期から、視線への恐怖は大学入学の上京後に始まっていることから、両者が結合した在学時の作品イメージじたい現在進行形で、今後も変わっていく様子が示唆されている。

生物界の理論を援用した自身の創作への論考は、「生まれもつことのなかった体色を、画面上で表現している」とするユニークな創作イメージの分析に、よく合っている。学位論文にふさわしい内容として、審査会の承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

松村さんは学部の頃から写実を基本に、実験的な制作をしてきた。その確かな観察力と創作力により、大胆で力強い画面を構築し、独自の世界を表現してきた。

論文は「標識色」と「隠蔽色」という題目であるが、学部の頃既に隠蔽色的な作品を描き、その作品制作におけるポテンシャルを感じさせていたのを覚えている。

標識色と隠蔽色という、相反する作風に現れているように、博士に入ってから彼女の作風の振り幅は大きい。写実を基に様々な方向性を持った実験的な作品からは、多くのことに挑戦し模索している姿勢を感じる。しかし、論文にあまり書かれていない形態感においては、造形的表現にやや欠けているように思える。

「真実は誰も知らない」・修了制作であるこの作品は、色彩的には綺麗な標識色の所もあるが全体的には隠蔽色的である。派手な狙いではあるが、品よく抑え込まれた表現に博士に入ってから創作活動を示唆しているように感じられる。

「pansees」・(パンジーの花に、怖さや魅力を感じ毒のある様子を描いた。)とある。花から染み出る匂いや空気を表現し、パンジーを透して彼女の気持ちが伝わってくる。標識色とも隠蔽色ともとれる色使いは、彼女の世界である。

「醒めない眠り」・有芽の会で法務大臣賞に選ばれたフラミンゴの作品である。(モチーフの形や部位、質にとらわれず表現した。)とある。コメントのとおり最初は、何が描かれているのかわからないが、不思議

議に魅力を感じた作品である。隠蔽色の比率が多い作品で、見せ方でものを言った作品である。感覚的に魅了する作品であるが、形態が見えてくるにつれ魅力が薄れてきたのは、フラミンゴの造形的な表現・形に甘さがあり、表面的に見えてしまうせいなのか？

「思いの儘に」院展出品作である。暗い画面に数羽のフラミンゴを構成した作品である。見え隠れしたフラミンゴが、論文に即した表現で描かれている。彼女らしい独自の表現を感じるが、論文にこだわり、フラミンゴの塊感や画面の抵抗感が希薄になったと思う。

「変わりゆく迷路」・院展出品作。(サンゴ礁の上で動き回る魚の模様と、サンゴの形が重なり合い、一体化して見えたり見えなくなったりする様子を描いた) 標識色 隠蔽色の両方が強く出た作品である。色彩的にきれいにまとめられ、彼女の色に対する興味の強さを感じられる。構成と感覚的な処理に彼女の感性が感じられるが、深みと造形的狙いが、よりあれば、もっと充実し迫力のある作品に仕上がったと思う。

「cornucopia」・神話からイメージした作品である。人物と食材の載った皿との組み合わせによる作品である。彼女の作品にしては珍しく、造形的で形のわかりやすい作品になった。逆に、わかりやすいが故に、彼女の感覚的不思議さが消えて魅力というものが薄らいだ。形態的にはわかりやすいが、表現が硬く描写的なため、感覚的魅力まで持っていけなかったのではないだろうか。

絵画の基本は明暗によるバールと形態感にあると思う。色合いは、時間によって変化し、置かれた空間や見る人によって変わってくる。色はその画面に華を添え、艶を出し、とても大切なものではある。色のハーモニーによって、魅力的な絵画もあるが、人々に説得力を持たせるのは容易ではない。色についての論文を作成し、チャレンジし、様々な作風で新たなものを模索している姿勢はとても好感が持てる。しかも、どの作品も博士としてのレベルに達しており、これからが楽しみである。しかし、将来、作家としてより望むことは今までの仕事を絞り込みまとめ上げ、松村さんとわかるオリジナリティを築いていくことだと思う。そのためには、造形的な狙いを大切にしてほしい。

(総合審査結果の要旨)

申請者は自分が普段生活している首都、東京で感じた不快感、警戒心を軸に論文と作品を展開した。その中でも、トライポフォビクな模様、色彩に対して強い関心を示し、その敏感で鋭い感性は作家として重要な資質であると考えられる。自作品のモチーフを柵(又は鎧)として見立てることにより、現実世界との距離を保ち、作品を私的空間という認識で表現を試みており、申請者の心理と作品とを深く掘り下げて表している。

第1章「標識色」と「隠蔽色」では申請者の作品の根底に潜む色彩と模様の関係性を的確に論述し、またモチーフとする動植物に申請者が惹かれる理由と一般的な解釈の比較がなされていた。この章によって申請者の作品と論文と整合性ははっきりと論証をされている。

第2章 蠱惑と警戒のテリトリーでは、申請者の持つ「蠱惑」に対する認識を、蜷川実花や他の作家に共通点を見出し、自身の出身地と現住地の環境の差から生じた「警戒」を自作品を例にあげ、端的に検証をしていた。

申請者は、「蠱惑」的な美しい色彩と豊かなマチュールを作品の中で如何なく表現しており、その持論と作品は申請者の論述している通り、“相手と自分”から“自分の中”へ変容していつている。その変容の過程で申請者は「標識色」と「警戒色」をより複雑な構成で表現し、独自の視点で発展をさせていきたいと述べていた。今後、トライポフォビアへの一般的ではない愛着と、申請者が予め持ち携えている明るい色彩感覚を生かし、展開させることができると評価をでき、学位論文として十分な内容、レベルとして審査会の承認を得た。